# 林黒土多幕劇集

●島原黙示録異聞

CATHOLIC REPUBLIC

●葦書房

林黒土

# 林黒土多幕劇集

●島原黙示録異聞

# こりゃのれぷぶりか

CATHOLIC
REPUBLIC

●殉教天草四郎陣中旗祭三百五十周年記念
●アントワーヌ小劇場開設百周年記念

林黒土

◉葦書房

林　黒土（はやし　こくど）

大正8年2月1日生

昭和28年　毎日中学生新聞懸賞児童小説「光の子」一席入選

昭和31年　「花火」「青い火花」で日本児童劇作家賞受賞

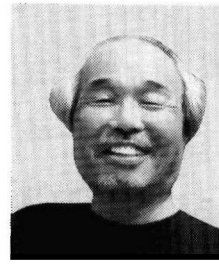
昭和41年　「捨て犬」全国ラジオ作品コンクールで文部大臣賞受賞、『林黒土一幕劇集』出版

昭和42年　「貧乏神」テアトロ戯曲賞

他に、児童劇、放送劇多数

現在、　九州大谷短期大学国文学科演劇放送コース主任教授、日本演劇学会会員、日本児童演劇協会会員

住所　福岡県飯塚市外秋松242（〒820）



林黒土多幕劇集

かとりかのれぷぷりか

一九八七年九月十日初版印刷
一九八七年九月二十日初版発行

定価二八〇〇円

著者　林　黒土

発行人　久本三多

発行所　葦書房有限会社

福岡市中央区赤坂二丁目一四番二二号

電話〇九二（七六一）二八九五

振替　福岡一―三九四三〇

印刷・製本　凸版印刷株式会社

©Kokudo Hayashi, Printed in Japan

落丁・乱丁本おとりかえいたします。

0074-8730-0135

# まえがき

一、一九四八年(昭23)から一九六六年までの十八年間に、高校演劇の作品を約20本書いたが、「春雷」「蚊遣火」「筑豊の少女」を除き、5本を選んで未来社から『林黒土一幕劇集』として出版した。

二、以後十三年間、再現の世界(リアリズム演劇)から脱出すべく、演劇史、民俗芸能史、能、狂言などにアプローチし、その間、「貧乏神」「おかめ」などを習作した。

三、一九七八年、九州大谷短期大学の幼児教育学科の講師として、野口、竹内理論を実践。七九年同短大に演劇放送コースが開設され、大島勉氏をブレーンに、宮本研・岩淵達治・清水邦夫・藤木宏幸・伊藤洋・定村忠士・市川雅・松原剛・浦山桐郎・須藤出穂・中村新・永曽信夫・竹内敏晴・高山図南雄・金両基・杉山とく子・小谷野洋子・池田潤子・上坪隆氏らを講師に迎え、八三年迄の五年間、一番前の席に陣取って学生たちと一緒に、演劇のいろはから勉強をしなおした。

四、今度出版する6作品のうち「貧乏神」を除く5作は、短大の卒業公演の為に書き下したオリジナルで、反近代劇の方向を模索する実験的な作品でもある。出版にはためらいもあったが「林黒土の戯曲世界を残そう」という人たちのすすめもあり、又この八年間の私の作品は、長篇の叙事詩劇で

レーゼ・ドラマとしても鑑賞に耐え得るのではないかと思い、出版に踏み切った。

五、本のタイトルを『かとりかのれぷぷりか』と題し、年代順に次の六本の作品を収録した。

①「貧乏神」
テアトロ特別戯曲賞受賞

②「おかめ」
'79―一期生・卒業公演

③「傾きに花吹く歌舞伎役者論語(ばなし)」
'80―二期生・卒業公演

④「古き神々の復活」
'81―三期生・卒業公演

⑤「娘々廟(にゃんにゃんみゃお)にて」
'83―五期生・卒業公演

⑥「かとりかのれぷぷりか」
'85―七期生・卒業公演

六、六〇年安保闘争に敗れた学生たちは演劇を起爆剤にしてもう一人の自分、もう一つの新しい世界を夢み、演劇の大爆発を起した。そしてその当時は地方が一つのテーマになり得た。併し七〇年代に入ると演劇は地方を忘れて都市化し、饒舌(じょうぜつ)と沈黙の二方向に分極化していった。その七〇年代に、「九



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

州で何かがおっぱじまるぞ!!」と銭金(ぜにかね)を度外視して東京からトップクラスの演劇人が五年間に亘って九州大谷短大に出講された。

八〇年代の演劇は世界の大都市と大都市とを結ぶ演劇国際化の形相をみせ始めた。そんな中で、六〇年代の地方（田舎）のテーマを九州で守り続けた、このささやかな作品集が何らかの証言になればと思っている。そういう意味をふくめあえて、九州に根を張っている葦書房の久本三多氏に出版を託した。編集の中津千穂子女史に合掌。

【かとりかのれぷぶりか】目次

はじめに　1
貧乏神　9
おかめ　91
傾きに花吹く歌舞伎役者論語　153
古き神々の復活　215
娘娘廟にて　275
かとりかのれぷぶりか　377

あとがき 512
解題 519
大谷と林先生　高橋英子 521
林黒土とその作品　高山図南雄 523
林黒土小論　宮本　研 526
再現から示現の劇世界へ――林黒土の戯曲　大島　勉 530
林黒土作品歴 549

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

【ファールス】

# 貧乏神〈一幕〉

――日本民話より――

**時**　昔。ある大晦日の雪の夜。大晦日の亥の刻、四ツちょっとすぎより、子の刻、九ツすこし前まで。

**場所**　雪国の国境いにある山小屋。うち続く圧政と飢饉で、荒れ放題に荒れた樵・兵六の小屋。上手が居間で、一段高い床になっており、下手が土間。土間の下手奥に出入口の引戸。

居間の正面中央に囲炉裏が掘ってあり、奥正面上手寄りにささくれた武者窓。その武者窓の外側は揚げ戸になっているが、薪がわりに使われたとみえて殆ど原型をとどめておらず蓆がたれ下げてある。上手前には引戸の押入れ。

**人物**

貧乏神
樵　兵六
その老婆
樵　捨吉
その女房　お杉
村役人・山守　脇山三左衛門
同じく・横目（声のみ）　嘉助
旅の商人（実は殿様）
同じくそのつれ一（実は内膳という侍）
同じくそのつれ二（実は左内という侍）
庄屋（声のみ）伝兵衛
組頭の仁五郎（声のみ）

戸外は身を切るような風の音。兵六が上り框で、古鍋、古口鍋、古鉄瓶、古茶碗、などを大風呂敷に包み込んでいる。上手居間では老婆が、ブツブツ念仏を唱えながら仏壇に縄をかけている。

兵六　お婆々、さっぎがら何してるだ。はようせんと、山守さくるだぞ。

老婆　だどもよう、御位牌だけ持って行ぐわげにもゆがねえだべ。

兵六　ンだら、上段もからげてゆくつもりかや。

老婆　ンだ。御先祖さまや爺さまを野晒しにするわげにはゆがねえもんのう。

兵六　チェッ。そんだらもん、背負うて……重荷になるだけだに……。

老婆　だでもよう、野垂れ死にしたとき、上段なげれば冥途にいって寒かんべ……。なんまいだぶつ……。なんまいだぶつ……。

兵六、下手の土間の隅から斧、鉈、鎌、鋸など樵の道具を蓆にくるみながら、

兵六　極楽浄土とやらに行ぐためには、そがァにも苦労つまねばなんねえもんかのう。

老婆　ンダァ。娑婆つうところは三毒煩悩、風雪暑寒の苦を忍ぶところじゃで……。なんまいだ。

なんまいだ。

兵六、樵の道具を蓆に包み、背負木にのせ終わって、仏壇を背負った老婆に、

兵六　ンだらァ、お婆々……。

老婆　あいやァー。もう忘れ物はないかや?!

兵六　ねえだ。あとは重荷になるもんばかりだで……。

兵六　そんだら……。

老婆　ンだァ……。

と、老婆土間におりかけると、上手押入れの中から、

貧乏神　（声のみ）ま、待ってくンろ！　忘れもんじゃ……。忘れもんじゃよ。

老婆と兵六、ギョッとして押入れの方を振り返り、顔を見合わせる。と、押入れの引戸があいて、うらぶれ果てた恰好の貧乏神が藁靴を片手に這い出してくる。

老婆　あンれェ……おみゃァは……。

貧乏神　ああ、お前(みぁ)たちが夜逃げさするつうもんで、急いで藁靴つくっていたども、あんまり急な話だで、片っぽうしか間にあわなかっただ。

老婆　ンだら……お前は……。

貧乏神　ああ。一緒について行くだ。

老婆　な、なんじゃと?!　ついてくるだと?!

貧乏神　ンだ……。

兵六　……何じゃ、ばッさま……この老耄れ爺さまは……。人の家の押入れから藁靴さ片手にゴッソゴッソと這い出してきて……。

貧乏神、上り框で藁靴を履きながら、

貧乏神　婆さまよう……草履でも草鞋でもええが片っぽうないがのう……。

老婆　ふン！　おみァにくれてやる草鞋があるぐれえなら夜逃げなんぞしやしねえだ。

貧乏神　……そりゃ、そうじゃのう……。せんない。だらば、片っぽう裸足で出かけようかい。どっこいしょっと……。

と、杖をついて、片っぽう裸足のまま、土間にたって、

貧乏神　えろう待たせたのう、だらば出かけようかい。

と、戸口の方に行きかける。

兵六　（訝って）……お婆々、この爺さまは一体、何物じゃ……。

老婆　貧乏神じゃよ！

兵六　貧乏神?!

貧乏神　（笑って）……兵六とか……いうたのう……。へ……。旅は道づれ、世は情……。あんじょうたのむだぞ……。

兵六　……?!

老婆　おみァは、ほんだらこと、おらァたちについてくる気だかのう。

貧乏神　ああ。仏の顔も三度というだで。おらァも気ひけるだども、三代も厄介になってると情さ移ってしもうてのう……。

老婆　情が移っただと?!

貧乏神　ンだァ……。何処さ夜逃げするか知らねだども、おみァたちの行ぐどこに俺ァもついで行ぐだ。

老婆　ウーム。こ、この貧乏たらしの厄病神めが……。

貧乏神　（笑って）そう怒るなてや……。婆さまの先々代からの付合いでねえか……。

兵六　お婆々ふんとだか?!……こ、この爺さまのいうごと……。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com